

読みの広がりや深まりを目指して ～三角ロジックの活用～

新潟市立松野尾小学校
前田章圭 (H25 年度)

(主張)

「立場」「根拠」「理由」の3観点からなる「三角ロジック」という論理的な説明の仕方を用いて、児童に自分の考えを書かせる指導を構想した。論理的な思考が視覚化されることで、自他の考えを比較させやすいと考えた。まず、児童が「三角ロジック」を効果的に活用するように、「AorBの選択式課題」を提示し、「立場」を明確にさせてから「根拠」と「理由」を考えさせた。

この働き掛けにより自分の考えが整理され、友達の考えを把握し、「根拠」や「理由」を比較した話合いができるようになった。しかし、「自分の立場への固執」、「正確な文章の理解」という面で課題も見られた。そこで次実践では「話合い時の教師の働き掛け」を意識し、児童から発言されていない叙述を教師から提示するようにした。すると、授業のねらいに沿った話合いができるようになった。また、教師の追加発問や補助説明が、友達の考えのよさに気付かせることにつながった。

この手立てによって、考えを整理して書いたり話したりする姿や、友達と自分の考えを関わらせる姿が見られた。その結果、違う立場の考え方に気付いたり、考えのよさを認めたりする姿が見られ、児童の読みが広がった。また、同じ立場同士でも、「根拠」や「理由」の相違から、児童の読みが広がったり深まったりする姿が見られた。

【本実践における言葉の定義（単元終末時に目指す児童の姿）】

| | |
|--|--|
| <p style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">読みの広がり</p> 違う立場の考え方に気付いたり、考えのよさを認めたりする姿。 | <p style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">読みの深まり</p> 互いの立場を比較し、自分の立場の「根拠」や「理由」が増える姿。 |
|--|--|

1 研究主題設定の理由

学習指導要領解説国語「読むこと」の領域では「考えの形成」について『文章の構造と内容を捉え、精査・解釈することを通して理解したことに基づいて、自分の既存の知識や様々な体験と結び付けて感想をもったり考えをまとめたりしていくことである』と位置付けている。これまでの自分の指導を振り返ると、児童に感想や考えのまとめを書かせたり、交流させたりしてもうまくいかないことがあった。それは、「捉えたこと」「理解したこと」「既存の知識や様々な体験」等の視点を考えずに取り混ぜていたからであると考えられる。

「考えの形成」に基づく内容で考えを構成しなければ、説得力に欠けた主観的な読みとなってしまう。また、個の読みに終始すれば、文章の捉えや理解、既存の知識や様々な体験等が書けていても、一面的なものとなる。自分の考えと友達の考えとを関わり合わせることで、新たな読みの視点や考え方、自分や友達の考えのよさに気付くことができる学習となる。「考えの形成」に関する内容に基づき友達と交流をする活動は、読みの広がりや深まりのために必要不可欠である。

そのためには自分の考えをもち、話合いの場で自他の考えを比較する必要があるが、その土台ができていない。その原因は以下の2点が挙げられる。

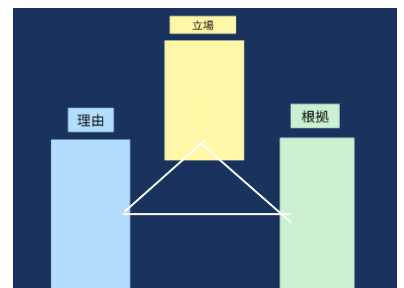
- ①書くべき要素や考えの書き方が分からない。 【考えの書き方】資料1・2
- ②何を比較するのが分からない。 【比較の仕方】資料3

そこで「三角ロジック」というワークシートを用いて、自分の考えを整理して書かせ、児童が友達との考えの比較がしやすくなる指導を構想した。児童の考えが明確に表現され、互いの考えが理解しやすい仕組みを取り入れることで、児童が考えを関わり合わせる際に役立ち、読みの広がりや深まりが表れる姿を目指した。

2 研究内容

(1) 三角ロジックの概要

3つの観点に沿って考えを書かせることで、説得力のある論理的な思考・表現となる。これを活用して、「考えの書き方」や「比較の仕方」の課題を解決する。



本実践での活用…〈立場〉〈根拠〉〈理由〉の観点をセットで書かせる
 立場…課題に対する児童の立場(本実践では、AorBで選択させる)
 根拠…叙述をそのまま抜き出す(ページ数や段落を入れる)
 理由…立場と根拠をつなげる理由を書く
 (2) (体験、既存知識、複数の叙述の関連付け、辞書、仮定等)

活用方法「立場」「根拠」「理由」の3観点を項目ごとに分けて、児童の考えをそれぞれの枠の中に当てはめさせていく。枠を分けることで箇条書きとなり、必要な情報が整理される。また、色や位置によって、それぞれの観点が視覚的に比較しやすくなる。

しかし、三角ロジックを与えるだけでは、友達との関わり合いを生むことはできない。そこで、話し合いに活用できるように、いくつか指導に工夫を取り入れた。1つ目は、「選択式課題」を取り入れて自他の「立場」が明確になるようにした。「立場」のズレを明確にすることで、話し合いに目的意識をもたせるようにした。2つ目は「根拠」が即時共有できるように、〇ページ〇行目とキーワードを書かせ、端的に書かせるようにした。3つ目は「理由」を書くのが難しい児童に観点を提示したり、友達の内容を価値付けて繰り返し共有したりして、「理由」のイメージを時間をかけて定着させた。

目指す児童の姿捉えたことや理解したこと、根拠、既有的知識や様々な体験との関連付けを話題にし、児童が自他の考えを比較できるようになる。話し合いを経て、振り返りでは、違う立場の考え方に気付いたり、考えのよさを認めたりして読みを広げた記述が見られるようになる。また、同じ立場の考えを聞き、「根拠」や「理由」の選択肢が増え、読みを深めた記述が見られるようになる。

3 研究の実際

【実践1】新潟市立松野尾小学校（令和3年度6年生19名：男子11名女子8名） 2月実施

単元名 登場人物の関係をとらえ、人物の生き方について話し合おう 題材『海の命』（光村図書）

（1）単元と児童について

本単元は、児童が登場人物の人柄や対人物が主人公へ与えた影響について読み取り、文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、読みを広げたり深めたりすることがねらいである。

前単元で三角ロジックを活用して、読み取りを行った。枠にはめて、観点ごとに分けられているため、考えは整理して書くことができた。しかし、多数の立場が乱立し、多様化したため、比較させることが難しく、うまくいかなかった。

そこで本単元では、三角ロジックに加えて、選択式課題を取り入れて立場が明確になるようにした。また、「理由」について、具体例を示したり、友達の考えを紹介したりしたことで、考えを書くことに重きをおいて、実践を行った。

（2）実践内容

①学級全体について

第4時「父は一人前の漁師かどうか」を課題とした。「立場」は全員にもたせることができ、「根拠」を記述する児童も多かった。しかし、「理由」を書くのが難しく手が止まる児童が多かった。辞書やインターネット等の様々な観点を教師から示し、書けた人の考えを共有させるために同じ立場のグループを構成し、意見交流を行った。その後、互いの立場に分かれ全体討論を行った。「地球の気候と魚の関係」「もぐり漁師の二人一組で行うルール」など調べた知識を基にした「考えの形成」が見られた。発表の関わり合いが少ない学級だったが、活発な話し合いが行われた。（資料4）

第8時「打つ太一を止めさせたのは誰の影響が大きかったのか」を課題とした。同じ流れを繰り返すことにより、「立場」「根拠」「理由」の3観点をスムーズに記述する児童が増えた。（資料5）人数に偏りはあったが、同じ立場のグループを構成し、意見交流をした後、全体討論を行った。本時では、「与吉じいさ」と「おとう」の立場に分かれ、インターネットや辞書内容だけでなく、人物の言動とニュースで知ったことを関連付けて書く児童がいた。「考えの形成」の力の高まりが見られた。（課題提示との比較・資料6）

読みの広がりや深まりの達成度 ※第4時は教師の補助有、第8時は児童の自力解決

| | 読みの広がり | 読みの深まり |
|-----|---------------|---------------|
| 第4時 | (10/18) 55.6% | (17/18) 94.4% |
| 第8時 | (8/18) 45.4% | (15/18) 83.3% |

単元導入時と終末時の記述の比較（資料7～9） 読みの広がりや深まりの単元終末時アンケート（資料10）

②児童Aについて

A：学習課題「父は一人前の漁師だったといえるか、そうでないか」（4/10）

一人前の漁師
だったといえな
い

五場面六行目
この魚を取らなけれ
ば、本当の漁師にはな
れないのだと太一は泣
きそうになりながら思
う。」

➡

ぼくはこの問題について父は最初の意見と変わらず一人前の漁師だったとはいえないと考えました。
・一人前の漁師だとしたら、10日間も不漁というのは不漁の日が続きすぎているんじゃないかなと思いました。
・一人前ならロープをほどける気もするけど解けなかったということからも一人前とはいえないと思いました。

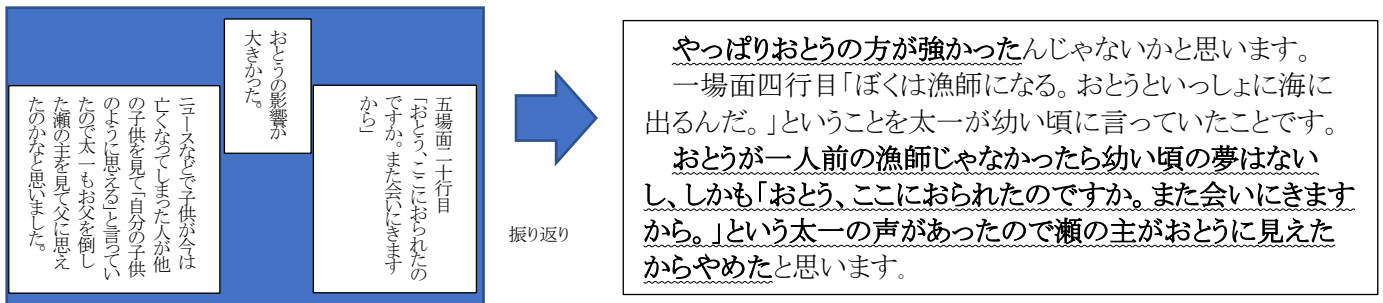
振り返り

考えの書き方…【○】「立場」「根拠」「理由（叙述から自分の解釈）」を分けて書き、整理できていた。

比較の仕方…【○】立場の違う考えに反対意見を述べた。勝った、負けたが一人前かどうか話題になった時に、「スポーツの世界では、勝ってこそ一人前」と理由の違いを比較して発言していた。

目指す姿…【○】本時でAは違う「立場」の考えを聞いて、自分の立場が「やはり正しい」と考えた。一次思考と比較し、振り返りには、「根拠」と「理由」が増えていた。読みが深まったといえる。

I：学習課題「打とうとする太一を止めさせたのは、誰の影響が大きかったのか」（8/10）



考えの書き方…【○】「立場」「根拠」「理由(自分の既有知識)」を分けて書き、整理できていた。第7時までは、「理由」は(叙述から自分の解釈)しかなかったが、本時で既有知識の関連付けが書かれるようになった。

比較の仕方…【○】立場の違う考えを聞き、自分の考えに関連付けていた。第4時では、「父は一人前とは言えない」と記述していたが、本時の振り返りでは、父が一人前だという捉えに変化した。友達の意見に影響を受けているといえるため、比較ができていると考える。

目指す姿…【○】本時でAは違う「立場」の考えを聞いて、自分の立場が「やはり正しい」と考えた。一次思考と比較し、振り返りには既有知識に加えて、叙述からの自分の解釈を書いていた。ここでは、相手の立場の意見を基に自分の考えを見直していることから、読みが深まったといえる。

③実践1の課題

書く時間を長くとったため、「話合いの時間がもっと欲しかった」という声が出てきた。また、「理由」が多様化されたことで、話合いの広がりが見られた反面、叙述への意識が弱まってしまった。インターネットでの検索、「もしも〜」等の仮定の話が話題の中心となったため、「文章の精査・解釈場面での働き掛け」という部分が十分ではなかった。話合いの中で、教師の介入によって、本文へ立ち返る補助発問をするとよかった。

立場を決めさせたことで、自身の考えにこだわりをもつ児童が多かった。比較はできたが、「相手の考えのよさを認め合う」という部分が振り返りにはあまり表出されなかった。自分の立場だけでなく、違う立場の納得する部分を見付けるような働き掛けができるとよかった。

【実践2】新潟市立松野尾小学校（令和4年度5年生11名：男子3名女子8名） 6月実施
単元名 登場人物の心情を捉え、感想をまとめよう 題材『カレーライス』（光村図書）(8/10)

(1) 単元と児童について

本単元は、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができることをねらいとする。友達と考えを共有させて、読みを深めたり広げたりして、内容を理解することにつなげたい。

児童はこの単元で初めて「三角ロジック」を活用する。児童は「根拠」と「理由」の区別が十分ではなかった。まず、「根拠」を基に「立場」を決めることを重点的に指導した。「理由」は教材の内容上、自身の体験と重ねやすい。その反面、体験がない場合は書くことが難しいこともある。

考えを書いたり、整理して分かりやすく表現したりする力は十分ではないが、児童主体で話す力が付いている。児童の実態に合わせて、【実践2】では、三角ロジックを活用した考えを書く時間を短くし、話し合うことを重点とした。

(2) 実践内容

①学級全体について

第4時は「ひろしが一番怒っているのは、ゲーム機のコードをぬかれたことか、そうでないか」を課題とした。「立場」は全員にもたせることができたが、「根拠」と「理由」が混じっていた児童が多かったので、児童に観点や書き方を説明しながら進めた。グループ活動を行い、全体共有をするのは初めてだったが、「根拠」「理由」についての違いを把握し始め、「○ページ○行目には〜」と話す児童が出てきた。話合いは「コードを抜かれた」立場が多数派を占めた。自分の体験による「考えの形成」はできたが、自分の立場に固執してしまう児童が多かった。

第8時は「ひろしは子どもっぽいかわりでないか」を課題とした。「立場」は全員書くことができたが、「根拠」と「理由」を書くのは時間が短く、書けない児童もいた。同じ立場のグループでの話合いでは、考えを書けなかった児童も友達の考えを聞いて、考えをもつことができた。物語全体を読み取った話合いとなったが「根拠」をしっかり話していたので、論点に沿って課題解決を進めていた。(資料1-1)しかし気付かせたい一文が児童から出てこなかったため、教師から補助発問や説明をした。児童の振り返りには、教師の意図した一文に着目する記述が見られた。

読みの広がりや深まりの達成度※第4時は教師の補助有、第8時は児童の自力解決

| | 読みの広がり | 読みの深まり |
|-----|-----------|-----------|
| 第4時 | (4/10)40% | (7/10)70% |
| 第8時 | (7/10)70% | (8/10)80% |

読みの広がりの具体的な姿(資料1-2・1-3) 終末時の児童アンケート(資料1-4)

②児童 B について 単元導入終末の姿比較 (資料 15~17)

ア：学習課題「ひろしが一番怒っているのは、ゲーム機のコードをぬかれたことか、そうでないか」(4/10)

⇒話し合いで、「分かっていることを言われることについて一番怒っている」と話し合いが行われた。

考えの書き方…【○】「立場」「根拠」「理由(自分の体験)を分けて書き、整理できていた。始めは「理由」が分からず、困っていたが、自分の体験を関連付ける記述の仕方を身に付けた。

比較の仕方…【○】同じ立場での話し合いでは、「理由」は同じ体験や考えをもった人が多かった。「根拠」は違っていたため、自分との違いを比較できていた。

目指す姿…【○】本時で B は違う「立場」の考えを聞いて、自分の立場が「やはり正しい」と考えた。違う立場との討論では、根拠から言える説得力について指摘されたが、その考えに対して反論をしていた。相手から受けた意見に対して、自分の考えを再構成していることから、読みが深まったといえる。

イ：学習課題「ひろしは子どもっぽい、そうでないか」(7/10)

考えの書き方…【○】「立場」「根拠」「理由(登場人物の姿からイメージした姿)を分けて書き、整理できていた。読み取りも4時間目となり、自分の考えをスムーズに書くことができるようになった。

比較の仕方…【○】全く同じ「立場」「根拠」を書いている児童が他にもいた。しかし、理由は違っていた。そこに着目し、違う視点の理由が話題となっていた。

目指す姿…【○】立場は「子どもっぽい」から、「ちょっと子どもっぽい」に変わった。友達や担任の話聞いて、違う立場の考えにも納得したことで、考えの変化が見られた。また、話し合い後には「根拠」が追加されている。この姿から、読みの広がりや深まりが見られたといえる。

③実践2の課題

三角ロジックの観点に応じて内容を書かせるには「慣れ」が必要だと感じた。考えを書いて表現するのは、まだ難しい児童もいた。「考えを明確に表現する姿」は、話す場面だけでなく、記述でも現れるようにしたい。この型で書く経験を増やすために、他教科を横断して活用していけるようにしたい。

4 実践を通しての成果

「考えの書き方」については、ワークシートを活用することで、考えが構造化された。「共有の仕方」は観点や色ごとに分けられることで、互いの考えを比較する部分が明確になり、関わり合わせることができた。書き方を教え、共有することを繰り返すことで、児童の「考えの形成」の力が高まった。その結果、交流の質が高まり、読みの広がりや深まりを児童の姿から見ることができた。三角ロジックを活用して、書き方を定着させ、話し合いをさせることは読みの広がりや深まりに有効な手立てであると考えられる。今後も「ねらいをもとにした教師の意図的な補助発問やゆさぶり」を取り入れながら、繰り返し三角ロジックを活用することで、短い時間で説得力のある考えを示し、話し合いの時間を確保できるようにして、質の高い読みの広がりや深まりを目指していきたい。

5 引用・参考文献

- ・文部科学省(2019)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』
- ・佐藤佐敏 (2013)『思考力を高める授業』(株式会社 三省堂)
- ・鶴田清司 (2017)『論理的思考力・表現力を育てる三角ロジック』(図書文化社)
- ・佐藤佐敏 (2017)『国語科授業を変えるアクティブラーニング読みの方略の獲得と物語の法則の発見』(明治図書出版株式会社)
- ・立石泰之 (2019)『確かな教材研究で読み手を育てる「海の命」の授業』(明治図書出版株式会社)
- ・樋口万太郎(2020)『子どもの問いから始まる授業』(学陽書房)
- ・佐藤佐敏 (2021)『国語科授業を変えるアクティブラーニング読みの方略の獲得と物語の法則の発見Ⅱ』(明治図書出版株式会社)